

全国の地域振興に資する人材育成を目指して

本誌編集部

- 団体名…特定非営利活動法人 島の風（沖縄県伊是名村・伊是名島）
 - 事業名…「島塾」―風の学び士の学び―（地域に学ぶ人材育成塾）
- キックオフ事業

学びの場、島塾の開講

離島の人材育成は、都市からの眼差
しでも、机上でもなく、地元の現場か
ら学び始めるべきである。伊是名島で
島内外の受講者が集う学びの場、島塾
を定期的に開催し、いずれは塾から全
国の地域振興に資するキーパーソンを
輩出させたい――。

NPO法人 島の風（※）の納戸義彦理
事長は、そんな思いを実現すべく平成

二八年度の人材育成基金助成事業に応
募、採択された。事業内容は、島塾の
本格的な開講の足がかり（キックオフ）と
する、①古民家再生を中心とした五日
間の集中研修（座学）の実施、②講師を
招いた公開講座の実施、③講演録を含
めた記録小冊子の制作である。

日中は古民家の修復、夜は座学

本事業の核となるのは、①集中研修
である。島の風がこれまで取り組んで



島の風の活動について説明する納戸義彦理事長。



古民家「がーべーちん」。島では昔から家を屋号で呼んできた。島の風の整備した古民家にはすべて屋号がついている。

きた古民家再生（現在までに三種を修復、島の暮らし体験の宿として一般に貸し出し）のノウハウをもとに、参加者は日中、古民家修復の作業に従事。夜は、納戸理

事長をはじめ地域振興に関わる方による座学やディスカッションを行い、島の自然や生活文化などを「残し守り伝える」ことの意義、経済性を追求するのではなく持続可能な地域づくりを実現するための意識やスキルを磨いていく内容だ。

集中研修の実質最終日となる四日目が、②講師による公開講座でありフォーラム代表理事を務める哲学者の内山節^{なかし}氏を招聘し、「未来への想像力／新しい社会の構想」をテーマに、農漁村に存在する自然と人間の共同体、生活文化、生産技術、知恵や伝承など、第一次産業からの模索による未来の社会の構想について講演をいただいた。

本講座は、地域住民や島外の方々への聴講も可能。納戸理事長は、「研修参加者のレベルアップはもちろん、島の住民が彼らや内山先生と交流することで思考の幅が広がり、

自分の地域についてより深く考え、行動するきっかけにつなげたい」と、公開講座とした理由を説明する。

島内外の二三人が参加した公開講座

平成二九年二月一五日から一九日にかけて開催された集中研修には、沖縄県内をはじめ東京都や大分県などから総勢五人の参加があった。参加者たちは、オリエンテーション、島内見学の後、古民家の修復に汗を流した。島の風が手がけた古民家に宿泊し、夜の座学はもちろん、宿に戻ったあとも参加者同士による活発な議論が行われたという。参加者からは、「島塾を通して、伊是名島はもちろん、自分たちの地域の課題や振興のあり方を深く考えることができた」「すごく大切なことを学んだ。地元でも島塾を開催したい」といった感想が寄せられた。

一八日、塾^{じゅつ}理^り客^{きゃく}公民館で開かれた内山節氏の公開講座には、島内外から二三人が参集。同氏は、自身が暮らす群馬



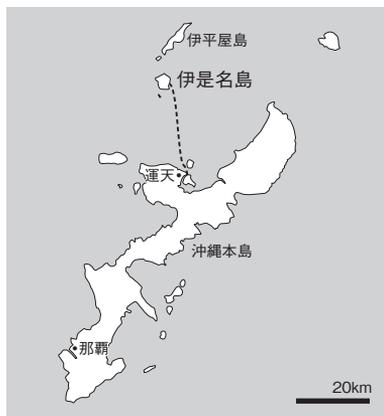
古民家を改修する島塾参加者たち。

県上野村（人口約一三〇〇人。村の面積の九割以上を森林が占める）での「伝統回帰の地域づくり」や「コミュニティを守る」ことが結果的に観光客を呼ぶ」などの活動を紹介しながら、農業や漁業に立

脚した新しい社会の構想について話された。意見交換では「上野村での観光客の受け入れ態勢や、民間と行政の連携について」「若者のこれからの働き方などの質問があげられた。

その後の交流会には、公開講座聴講者の大半が参加し、大いに盛り上がったという。

納戸理事長は、「内山先生の話聞いた島の方から、これからの島づくりの指針となった」など、非常に前向きな感想をいただいた。島内外の人材育成に向けて、島塾はやり続けていかなければならない事業だと再認識した」と自己評価する。また、「島塾が継続することで、島内外との交流も続いていく。塾が定着した時には、これ自体が地域資源として生まれ変わる可能性を秘めている」と事業継続に意欲を見せる。



自治体との連携による効果的かつ継続的な事業展開を

伊是名島は、沖縄本島の北方約二七キロメートルの東シナ海に位置する。今帰仁村の運天港から、フェリーいげな尚円が一日二便・片道五五分で本土（島間を結んでいる。主島の伊是名島のほか、屋那覇島、具志川島、降神島の三つの無人島で伊是名村を形成、琉球王朝第二尚氏の始祖・尚円の出生地としても知られる。

■仲田成徳・離島人材育成基金助成事業運営委員のコメント

「島塾」の地道な継続を

古民家の改修工事を自分たちで行うことができるのは、「島の風」の大きな強み。また、それをワークショップのようにして、島外から人材を呼び込む活動は、NPOならではの機動的で柔軟な発想ではないか。

古民家の活用については、今後、島内宿泊業者と予約状況を情報共有し、満室で受け入れられない宿泊者を融通しあうなど、島全体が共存共栄する仕組みを検討してみるのも面白い。

また、利用者の利便性を高める港でのチェックイン／チェックアウト、古民家滞在者を対象とした古民家改修体験プログラムの提供など、さまざまな事業展開が考えられる。

人づくりは一朝一夕にできるものではない。今回の事業「島塾」の地道な継続こそが、島内外の人材育成の近道である。

※NPO法人 島の風

平成17年設立。島に残る優良な自然環境や伝統的佇まい、生活文化やその基層を流れる風土などを「残し守り伝える」ことを目的とした活動を展開。さらには、その活動そのものを地域資源として捉え、持続可能な地域づくりの実現に取り組む（「活動方針」大意）。古民家再生事業を中心に、離島暮らしを考えている方を対象とした試住プログラムの提供、国指定重要文化財「銘苅家住宅」とその周辺を子どもたちとローソク行灯でライトアップするイベント「しまあかり」などを手がけ、ソーシャル・ビジネス55選（平成21年、経済産業省）、「地域再生大賞」大賞（同25年、共同通信社、地方新聞46紙）ほか、多数の表彰・受賞歴を誇る。

人口は一五三〇人（平成二八年一〇月末日現在、主産業のサトウキビほか、モズクの生産も盛んで生産量は県内第二位。近年のモズクの需要の高まりを受け、漁業者は海外からの研修生を受け入れながら「早モズク」の生産増に取り組んでいる。

同村企画政策課の神山利和課長および前川尚也係長によると、現在の課題

は住宅不足。Uイターの希望はあるのだが、空き家の貸し手がなかなか見つからないという。村では古民家を定住促進住宅として改修・整備。東京からの家族づれのイターの確保につなげるなど、着実な成果に結びついている。年間の観光客数（入域者数）は約四万人（平成二八年）。民泊の活用にも取り組み、修学旅行などを中心に年間

約六〇〇〇人の利用があるなど、村では交流人口の増加に力を入れている。今年度の事業は、島の風の強い牽引力によって推し進められた。今後、より効果的かつ継続的に島内外の人材育成を行っていくためにも、そして、本事業で育った人材を島に定着させるためにも、自治体と島の風との連携に期待したい。（森田）